

1.1 光の影響

一般的に、4月に播種後、種子が発芽して5月の1か月以上の期間は、直射日光による幼苗の萎凋や枯死を防ぐため、遮光を行う必要があります。しかし、6月の入梅以降からは、基本的には遮光は不要と考えられます。コンテナ苗に日光を十分に当てると光合成が促進され、苗高や根元直径の成長が高まります。逆に、日光不足の場合には、根元直径の成長が抑制されるため、特にヒノキの場合に、苗木の形状比が高まる傾向があります（図-13）。

一方で、最高気温が35℃を超える夏の猛暑時（7月下旬～8月下旬頃）の遮光は、苗木の高温障害を予防する観点から有効な措置と考えられます。

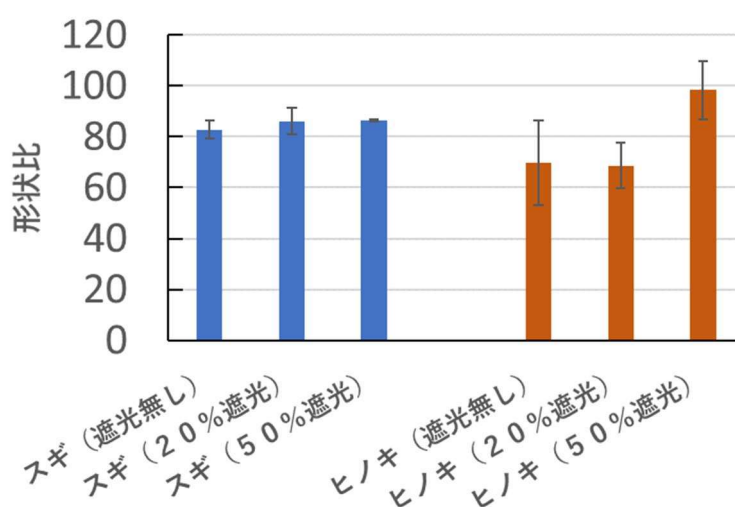


図-13 遮光によるコンテナ苗の形状比の比較

注. 平均値±標準偏差

1.2 抜取・出荷

育成したコンテナ苗は、専用の抜取機（図-14-1）でコンテナトレイから苗を抜き取り、出荷規格に満たない未熟苗と規格苗を選別します。岡山県では、出荷規格を満たすコンテナ苗数本をまとめて根鉢部分を薄いプラスチックフィルムで被覆した後に、網袋に入れて出荷する方法（図-14-2）が定着しています。被覆は根鉢の乾燥を防止する効果があるため、かん水が困難な林地において、一定期間、コンテナ苗の保存性を維持することが可能です。



図-14-1 コンテナ抜取機の例
(サンテクノ社製)



図-14-2 出荷用コンテナ苗の梱包例

13 病害虫等

コンテナ苗の育苗において、市販のココピートオールドやココピート*でも、培地は殺菌されていない可能性が高いため、土壌の病害については生育初期段階でも発生が予想されます。また、苗畑で育苗された、1年生幼苗（原苗）をコンテナ苗として使用する場合、苗畑段階での病害の感染等も考えられるため注意が必要です。頻繁にかん水を行うコンテナ育苗では、苗木の成長に伴って通気性が低下するため、病原菌が感染しやすくなる傾向があります。

稚苗段階では、病害虫の被害を特に受けやすいと考えられますから、こまめな薬剤散布を実施します。その際、同一薬剤のみではなく、有効成分の異なる薬剤を交互に組み合わせて、ローテーション散布するようにしてください。

なお、昆虫等の食害、台風、降雨等の衝撃によって発生した折損部分や傷は、そのまま病原菌の感染源となり（図-15）、後に大被害に至る可能性があります。従って、病害虫の予防は一連の作業として考え、どちらも励行することが重要です。予防効果を発揮する農薬としては、ベンレート水和剤、トップジン水和剤などがあります。

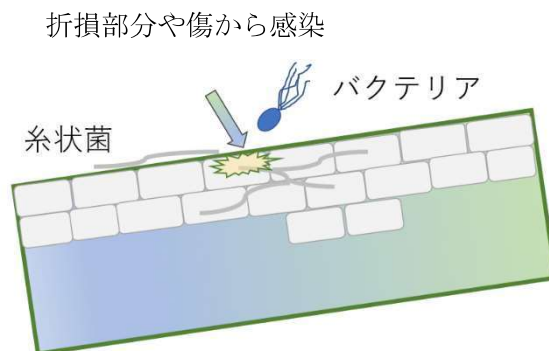


図-15 病原菌の感染の仕組み